失いたるか

454 彼の人と
同じ如くに
生い立たば
果して直く
生きられしかや

455 夏の朝
燕 高く
翔び交ひて
蝉の合唱
潮騒に和す

456 冬西の
波濤打ち寄す
巌頭に
我立ちおれば
闘志漲る

457 中秋の
山巓直下
遭遇す
遭難碑かな
満月の富士

458 子ら皆に
試練耐うべき
健康の
宿れと願う

晩冬の夜

459 冬の雨
体の芯に
滲み通り
伊豆の出湯に
醍醐満喫

460 心をば
放射に繋け
一点なる
直線にては
いや不安定

461 南行す
夜汽車の窓に
顔映し
不安に耐えし
あの夜あの時

462 小走りの
母の小袖に
縋りいて
微かに嗅ぎし
樟脳の香よ

463 破獄して
幽閉脱し
戻り来よ
白き花咲く

自由の土地に

464 幸せは
他人に見せる
ものでなく
静かにそっと
抱きしめるもの

465 木枯に
吹きさらばえつ
天狼を
仰ぎて佇てば
夢いや燃ゆる

466 子供らよ
遠くを目指し
生きてゆけ
慈しみもて
心みがきつ

467 旱天の
慈雨となりたや
かの人の
心の花の
萎れむ夏に

468 星のごと
尽きせぬ悩み
抱きつつ
地球は今朝も

廻りていたり

469 権力の
社会に与う
影響は
通底しおり
重力のごと

470 忍ぶれど
なお愛しき
彼の人の
面影抱き
山巓に攀づ

471 来復の
春の光に
包まれて
児らよ育め
青春の夢

472 劫初より
幾星霜の
積り来て
今朝開き初む
水連の花

473 目蓋閉じ
顔を朝日に
差し向けて
見詰める彩は

正しくいのち

474 墨突の
黝むことなく
遠近に
争い追いて
今日も終りぬ

475 知ることが
苦しみなる日
訪れて
俯きおれば
ヒゴの花落つ

476 如何にして
対峙すべきか
権力に
朝顔に問ふ
朱夏の朝

477 宙めぐる
北斗を追いて
北の果
岬に佇てば
風に声あり

478 窓外の
クレーコートと
コーヒーと
我は在りけり
そのかみのパリ

479 暖き
ベージュの霧の
霽れゆきて
人の世徐く
浮かび出でけり

480 ジャベールの
消えしセーヌの
流より
我は汲みたり
人の未来を

481 離りきて
改め夢る
愛しさ
故郷の庭に
咲ける石蕗

482 西風の
木犀の香を
運び来て
我が胸腔は
橙に染まれり

483 その昔
通ひ馴れたる
図書館の
床に落ちたる
鉛筆の音

484 高まれる
楠の葉擦れに
春の日を
待ち焦れにし
忍従の日々

485 言の葉を
な疎かに
扱いそ
往きにし人の
縁なりせば

486 お日さまの
光たっぷり
浴びたのち
樒に注ぐ
銀色の雨

487 洋上の
一点にまで
凧を上げ
空に抱かれし
あの冬の日よ

488 おりおりに
おちこちに咲く
花のごと
なべて人の
人生いとおし

489 朝夕に
汐は満干を
繰り返し
沙魚の子育ち
秋立ちにけり

490 南風
唐黍の葉を
揺すり往き
静謐のうち
秋立たんとす

491 馬鈴薯の
薄紫に
小糠雨
注ぎて濡らし
春は酣けゆく

492 我が生は
一本の弦
微笑みつ
おおいなるもの
漫ろ爪弾く

493 大根の
白き花房
萬緑に
埋もれて薄れ
夏は近づく

494 何時にても
銀河の微光
浴びながら
歩いておると
想い至れよ

495 先生に
警察官に
暴力団
交々逐われ
古希の桜よ

496 春眠の
枕辺に聴く
風の音
背戸の桜木
如何にありけむ

497 岐れ道
石道標
傍らに
秋桜こぼれ
秋酣けにけり

498 麦秋の
野を吹き渡る
風となり
かの旅人の
背を押さんかな

499 我墓碑は
路傍の石に
素朴な手
天愛でし者
ここに眠ると

500 権力が
知らぬ顔して
踏み躙る
たつきに怒り
鶏頭のごと

501 卯の花の
一期一会の
輝きに
眩しさ嬉し
初夏の朝

502 もの皆の
半端に断たる
志
我こそ継がめ
連翹のごと

503 何処より
目白一群
訪れて
俄か華やぐ
椿の繁み

504 東風ありて
梅の香運ぶ
夕つ方
想いは遥る
故郷の庭

505 幼き日
朝な夕なに
父母の
働く音を
聞きつつ育つ

506 枕辺に
母の夜なべの
音聞きつ
安らぎのうち
眠りに落ちぬ

507 古希の日は
過ぎ去りし日を
なぞりつつ
明日を夢見て
心華やぐ

508 春されば
庭の片辺に
咲き匂う
菫の如く
母よ健やに

509 暮れ泥む
紫陽花色の
夕暮に
ふと甦る
あなたの瞳

510 吹き募る
春の嵐に
恙なく
伸びてゆかまし
欅の若芽

511 種々の
悩み生いくる
人の世に
菫は今日も
日射し浴びおり

512 ひたむきに
健気に勤む
その果てに
花は必ず
笑えみ咲かむ

513 我生は
宇宙の滴
一滴の
蓮の台に
結びしものか